

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 5 月 26 日現在

機関番号：11501

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2012～2014

課題番号：24792535

研究課題名(和文) 退院支援を行う看護職のコンピテンシー・モデルの構築

研究課題名(英文) Constructing a Competency Model for Discharge Planning Nurses

研究代表者

森鍵 祐子 (MORIKAGI, YUKO)

山形大学・医学部・助教

研究者番号：20431596

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)： 退院支援を行う看護職のコンピテンシー・モデルの構築を目的として研究を行った。
退院支援専従看護職対象のインタビュー調査の結果や先行研究をもとに、40項目からなる“退院支援を行う看護職のコンピテンシー(案)”を作成し、退院支援専門部署の看護職を対象とした調査を行った。その結果、退院支援を行う看護職のコンピテンシー(案)をもとにした実践の程度と大切と思う程度の実態が明らかとなり、コンピテンシー・モデル構築への示唆が得られた。

研究成果の概要(英文)： This study aimed to construct a competency model for discharge planning nurses. Using results from interviews with discharge planning nurses and a previous study's findings, we developed a tentative proposal of the competency model for discharge planning nurses that consists of 40 items. A survey of discharge planning nurses was conducted to assess nurses' current competencies related to discharge planning, and nurses were asked to rank the importance of each competency. Thus, these results demonstrate the importance of constructing a competency model for discharge planning nurses.

研究分野：医歯薬学

キーワード：看護学 地域看護学 退院支援 コンピテンシー

1. 研究開始当初の背景

在院日数の短縮化によって、医療やケアが必要な状態のまま退院する患者が増加しており、患者や家族の退院後の医療や生活への不安が増大していると推測される。患者・家族が退院後も安心して継続した医療やケアを受けるためには、病院と地域の多職種・多機関が連携・協働し、質の高い退院支援を行うことが必要である。

質の高い退院支援を行うためには、退院支援の取り組みについて評価し、退院支援の充実化につなげる必要があるが、これまでに退院支援の質や退院支援を行う看護職の能力の視点から評価した報告は国内外共にほとんどない。わが国では、2008年の診療報酬改定以降、退院支援部門への看護職の配置が進み、2010年には84.2%の病院の退院支援部門に看護職が配置されていることが明らかとなっている。さらに、多職種が連携・協働する退院支援において、退院支援部門の看護職には、退院支援のコーディネーターを担うことや退院支援専任の看護職による在宅療養支援の充実化を図ることが期待されている。実際に、退院後も在宅で医療やケアを必要とする患者の退院支援においては、退院支援部門の看護職が退院支援の中心となっていることが研究者らの先行研究で明らかになっており、退院支援部門や退院支援専任の看護職は患者・家族を医療と生活の両面から支援し、在宅移行の重要な担い手となっていると考えられる。

研究者らはこれまでに、早期退院支援を目的としたスクリーニング票の導入と妥当性の評価に関する研究や、退院支援を受けた高齢患者の退院後追跡調査を実施し、退院支援体制の構築や退院支援を充実させるために、退院支援体制の現状を把握し、評価を行う必要性を示唆した。そこで退院支援の評価に着目し、Structure 評価として退院支援の取り組み状況調査を、Outcome 評価として在院日数や患者の退院状況から退院支援の評価を行った。退院支援を行う看護職には、退院支援の仕組みを作り、維持・評価・再構築するマネジメント能力が求められているが、1病院あたりの退院支援専任の看護職数は約0.8人と、退院支援は少数の退院支援専任の看護職の能力に依存していると推測されるが、その能力の検討および評価は十分に行われていないことを明らかにした。これらより、患者・家族が退院後も安心して医療およびケアを受けるためには、Process 評価として、退院支援の質および退院支援を行う看護職の能力を評価し、質の向上を図る必要があると考える。

看護職の能力の評価について、近年キャリア開発や人事の分野でコンピテンシーの概念が導入されはじめている。コンピテンシー (competency) とは、McClelland が職員採用の選考基準作成に際し、優れた職員が発揮している能力を行動レベルでモデル化した

ことにはじまり、「組織の成功につながる個人の成果、貢献を生み出すもとなる知識、スキル、行動特性を整理し、基準化したもの」と定義されている。看護職のコンピテンシーを明らかにすることにより、知識や方法にとどまらず、役割遂行に着目した評価や教育を行うことが期待され、退院支援を行う看護職においては、退院支援を行ううえで期待される、または必要となる能力が明らかとなり、退院支援の評価や教育に活用できると考えられる。看護職のコンピテンシーに関する報告は国内外で報告があるが、退院支援を行う看護職のコンピテンシーに関する報告はない。

2. 研究の目的

退院支援を行う看護職のコンピテンシー・モデルを構築し、看護職が行う退院支援の評価および質の向上に資することを本研究の目的とした。

3. 研究の方法

(1) 退院支援を行う看護職のコンピテンシー項目 (案) の検討ならびに作成

コンピテンシー項目の抽出に一般的に用いられている行動結果面接法 (Behavioral Events Interview : BEI) を用いて得られたインタビューデータから、退院支援を行う看護職のコンピテンシー項目 (案) を抽出した。集約されたデータをもとに、類似または同義の能力を整理して表現を整え、Krippendorff の内容分析手法を用いて、暫定的にカテゴリー化を行った。また、これまでの文献検討および視察等で得られた退院支援を行う看護職の能力の項目を加味して、退院支援を行う看護職のコンピテンシー項目 (案) を作成した。

(2) 退院支援研究者によるコンピテンシー項目の精選

コンピテンシー項目 (案) について、退院支援研究者による項目の確認を実施し、コンピテンシー・モデル (案) を作成した。

(3) コンピテンシー・モデル (案) に関する退院支援を行う看護職対象の質問紙調査調査対象

東北6県の一般病床数200床以上の114施設の退院支援部門看護職計228名 (1病院あたり2名の看護職を対象とする) を対象とした。

調査時期

平成27年2月から3月に調査を実施した。

調査方法

郵送法による無記名自記式質問紙調査とした。

調査内容

対象者の属性 (年齢、看護職経験年数、退

院支援部門経験年数，資格等），所属施設の概要，所属する退院支援部門の役割・機能，ならびに退院支援部門看護職のコンピテンシー（案）40項目について実践の程度と大切に思う程度を5件法で尋ねた。

倫理的配慮

ヘルシンキ宣言，疫学研究に関する倫理指針および看護者の倫理綱領に基づき，調査対象への倫理的配慮として，研究の趣旨ならびに調査は無記名で行い調査結果を公表する際は個人が特定されないこと，調査への協力は任意であり調査に協力しない場合でも不利益は生じないこと，データは厳重に管理し，外部に情報が漏れることがないように配慮することを書面にて説明した。

質問紙の回収は，郵送にて行い，質問紙への回答ならびに提出をもって調査への同意が得られたものとした。

調査の実施にあたっては，山形大学医学部倫理委員会の承認を得て実施した。

4. 研究成果

(1)退院支援を行う看護職のコンピテンシー項目（案）の検討ならびに作成

研究の実施にあたり，文献検討等を踏まえ，本研究における退院支援を行う看護職のコンピテンシーを「退院支援の成功につながる知識やスキル，行動特性」と定義した。

研究者らの先行研究において得られた退院支援を行う看護職のインタビュー調査データならびに先行研究，活動報告，書籍，先行研究による国内外視察結果より，コンピテンシー項目（案）を作成した。

なお，分析に用いたインタビューデータは，東北にある病院の退院支援部門にて退院支援を行っており，退院支援専従かつ看護職経験年数10年以上，退院支援部門経験年数3年以上の看護職6名のデータである。インタビューは行動結果面接法（Behavioral Events Interview：BEI）に基づき，「これまでに退院支援を行ってきて印象的だったことはどんなことでしたか」，「そのことについてあなたはどのように関わりましたか」，「その時どのような考えをもって行動しましたか」というインタビューガイドを用いて実施し，対象者の許可を得てインタビュー内容の録音とメモを取った。

インタビュー対象者の看護職経験年数の平均は30.5年，退院支援専従年数の平均は6.0年であった。分析に用いたインタビューデータの平均時間は87.3分，計524分であった。

インタビューデータから逐語録を作成したのちに，コンピテンシーに関する意味のある文脈を抽出し，意味のある最小の一文もしくは文の一部を記録単位として記録した。その結果，記録単位は計514単位となった。514単位をもとに，コンピテンシーまたは類似の内容を整理して表現を整え，暫定的にカテゴ

リー化し，先行研究，活動報告，書籍，先行研究による国内外視察結果と照合しながら，33項目からなるコンピテンシー項目（案）を作成した。

(2)退院支援研究者によるコンピテンシー項目の精選

コンピテンシー項目（案）の33項目について，退院支援研究者による項目の確認を実施し，40項目からなるコンピテンシー・モデル（案）を作成した。

(3)コンピテンシー・モデル（案）に関する退院支援を行う看護職対象の質問紙調査

東北6県の一般病床数200床以上の114施設の退院支援部門看護職228名を対象に無記名自記式の郵送質問紙調査を行った結果，110名から回答が得られ，全回答を分析対象とした（回収率・有効回答率48.2%）。

回答者の平均年齢は48.5歳，看護職経験年数の平均は26.5年，退院支援部門経験年数の平均は3.8年であり，退院支援専任は29名（26.4%）であった。

コンピテンシー・モデル（案）40項目について，退院支援を行う際に実践している程度を，「まったく実践していない」から「頻繁に実践している」の5件法にて，退院支援を行う際に大切と思う程度を「まったく大切と思わない」から「とても大切と思う」の5件法にて回答を求めた。その結果，実践している程度では「患者・家族に会う前にカルテを見る」が最も多く，次いで「患者にとってのキーパーソンを見つける」が多く実践されていた。一方，大切と思う程度は「自身が支援で悩んだときに相談できる人を持つ」が最も多く，次いで「分からないときには退院支援部門スタッフの意見を聞く」が多く大切と思われていた。

以上より，退院支援を行う看護職のコンピテンシー・モデル（案）をもとにした実践の程度と大切と思う程度の実態が明らかとなり，コンピテンシー・モデル構築への示唆が得られた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計0件）

〔学会発表〕（計0件）

〔図書〕（計0件）

〔産業財産権〕

出願状況（計0件）

取得状況（計0件）

〔その他〕

ホームページ等該当なし

6 . 研究組織

(1)研究代表者

森鍵 祐子 (MORIKAGI YUKO)

山形大学・医学部・助教

研究者番号：20431596

(2)研究分担者

(3)連携研究者